

# 意図帰属傾向に影響を与える個人特性についての検討

平野 文

対人場面において「他者の行動に対する原因・意図を推測する」意図帰属過程にエラーが起きると、相手の行動に対する意図帰属傾向の偏り（意図帰属バイアス）が生じる。本研究では、評価懸念・賞賛獲得欲求・拒否回避欲求という 3 つの個人特性が意図帰属バイアスの個人差に与える影響の検討を目的とする。先行研究に基づき、3つの仮説を立てた。仮説 1: 評価懸念が高いと、相手の行動を「相手の悪意のせい（敵意帰属）」または「自分のせい（自責帰属）」だと考えやすい。仮説 2: 拒否回避欲求は評価懸念を高めるが、賞賛獲得欲求は評価懸念と関連を持たない。仮説 3: 賞賛獲得欲求と拒否回避欲求がともに高いと、敵意帰属を行いやすい。これらを検証するため、研究 1 を行った。

研究 1 では、相手の意図が明確でない状況の場面想定法を用いた質問紙調査を行った。参加者には 2 種類のシナリオを読んで何故その状況に陥ったかを問う帰属傾向尺度、評価懸念測定尺度、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度、個人属性について回答してもらった。分析の結果、仮説 2 は支持され、先行研究と同様の関係が改めて確認された。仮説 3 は不支持だったが、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求から意図帰属バイアスへの影響が示された。仮説 1 は不支持で、評価懸念は意図帰属バイアスに影響しないという結果が得られたが、仮説 2・3 の結果から両者が無関連とは考えにくい。先行研究と結果が異なる理由を、研究 1 では回答時に評価懸念が低かったためと考えた。

そこで研究 2 では、参加者を「第三者が回答の評価を行う」と予告される評価群と、「回答は誰にも公開されない」と予告される統制群に振り分け、「仮説 4: 評価群は統制群よりも評価懸念が高く、敵意帰属と自責帰属を行いやすい」を検討した。

研究 2 でも研究 1 と同様の質問紙調査を行ったが、操作は有効でなかった。そこで参加者を評価懸念の高低 2 群に振り分け直し分析したところ、高群は低群よりシナリオ 1 の敵意帰属を行うという結果を得たが、評価懸念の影響は明らかにならなかった。

また、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求が意図帰属バイアスに与える影響は研究 1 と 2 で共通しており、賞賛獲得欲求が敵意帰属を促進し、拒否回避欲求は自責帰属を促進するという傾向がみられた。また、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求の効果は拮抗しており、互いの効果を抑制し合う可能性が示された。

今後の研究では、評価懸念と帰属バイアスとの関連について、最終的な意図帰属判断だけでなく、帰属の途中過程に着目するなど新たな観点からの検討が望まれる。（社会心理学）